

## 創立25周年を迎える新春



社団法人 生産技術振興協会

会長 池田悦治

1972年は正にわれわれ産業人が、いかにして福祉社会への適応体制を整えるかの課題を真剣に論議した年であった。

幸福の指標を物資の豊かさに置き、世界に資源と市場を求めて、経済の高度成長を遂げてきた時代が生んだ数々の功罪を整理して、我々はいま新しい福祉の指標を模索している。そして遂に人間性尊重の社会建設を結論した。

その間繰りひろげられた企業の社会的責任論議の中心も、専ら生存環境の改善と企業発展の調和にあったと言っていいだろう。

国連の第一回人間環境会議が「かけがえのない地球」をテーマに掲げたのも昨年(1972年)の6月である。これ程長い人類の歴史の今日的仕上げが、人間の生命条件の見直しにあるとしなければならなかったことの反省は極めて重大である。見方によれば、1972年という年は、人間文化を新たな尺度で測り直した年であるかも知れない。してみると、昨年は人間文化のあるべき未来のパターンを、世界の全人類の名において指標した年であったとも云えそうである。

1973年の新春が毎年繰り返されるお正月とは別に、新しい文化世紀の出発として重大な意義

を持つに至ったのも当然である。このような背景をふまえながら、生産技術振興協会は創立25周年を迎えた。

顧みれば、協会25年の歴史はそのまま社会変遷の歴史であって、極めて波乱多いものであった。科学技術の進歩と産業社会の変動とが、或いは密に、或いは疎に、互いに作用し合って、遂に今日の社会を生んだ。

産業社会が科学技術を導入するパターンが、人間生活環境の新時代的設定を目ざすものでなければならぬことは云うをまたない。全人類が幸福を求めて新しく設計する文化社会は、少くとも生命条件である自然が、絶対に尊厳せられる社会である筈だ。生産技術振興協会はこれに応じて技術を選び、産業の未来像を創造する架け橋となるべき使命と責任がある。

わたくしは、1973年の新春ほど新しい感激を覚えたことはない。今こそ協会は産学挙って新時代対応の姿勢を整え、進んで人間性豊かな福祉社会建設に献身しなければならぬ。論議は既に終わった。本年は実践の年である。論議は長い時間が要ったように実践には更に多くの時間が必要であろう。

われわれが取組む実践の前途には多くの創造と努力がある。けれども過去に蓄積された力を発揮できる機会を逃がしてはならない。

創立25周年に1973年を迎えた意義は深い。皆さんと共に決意を新たに、世紀の創造者の列に参加しよう。